カトリック仙台教区報

2014年1月5日　No.215
発　行
カトリック仙台司教区
〒980-0014
仙台市青葉区本町 1-2-12
Tel(022)222-7371 Fax(022)222-7378
発行責任　広報委員会
URL http://sendai.catholic.jp/

主のご降誕と新年のお喜びを申し上げます。

2014年 司教年頭書簡
―地区制度に向かって―

司教　マルチノ　平賀　徹夫

仙台教区の皆様、新しい年2014年を迎え、年頭のご挨拶を申し上げます。今年も、父である神さまの御心が行われますことを望み、わたしたち皆を御国のために働く者とならせてくださるように心を合わせて祈りながら進んでまいりたいと思います。

東日本大震災から丸三年が経ちます。今も悲しみ・苦しみの癒えない被災者の方々も多くおられるでしょう。原発事故の放射能被害から避難されている方々の状況も好転しないままのようです。教区の皆さんの今までの支援活動に深く感謝致します。疲れが相当にたまっているかとも思いますが、それをうまくほぐして無理にならないようにしながら、これからもご支援をお願いできましたらありがたいです。仙台教区としては、今、復興支援活動の第三期にあって、寄り添い・傾聴を活動の中心としているところです。

さて、今年は仙台教区が新しい形で出発する元年となります。教区に53ある小教区をグループ分けした「地区制」をとるからです。それは各小教区が独立して独自に進むのではなく、地区内全小教区が緊密に交流・協力し、連携の意識を強めながら、共にキリストの教えを生、生きそして伝える「教会」の意味を表していくことを目指すものです。今までも「共同宣教司牧地区」と呼ばれるいくつかの地区がありました。その良い例として「仙台中央地区」がありますが、そこは一つの地区として7つの小教区が協力し合い、担当司祭と各小教区の代表者がよく集まって話し合い、交流・協力を深め、力を合わせて合同の典礼や行事を行ってきました。小教区間の距離が近いこともうまくできた要素かもしれません。仙台教区は広い面積の中に小教区が散在しており、小教区間の距離が数十キロという所もたくさんありますから、どこでも「仙台中央地区」のようなわけにはいかないとも思いますが、今までの共同宣教司牧地区も含めて教区全体を俯瞰し、あらためて八つの地区に区割りします。その地区割の状況については別紙(各教会に配布)でお手元にお届けします。

各地区には3人ないし4人の司祭方の派遣となります。地区の設定では一般社会の生活圏を考慮に入れるとともに、司祭方の移動が容易であることをまず考えました。そして地区は、地区連絡会協議会とでも呼ぶべき司祭と地区内の各小教区信徒・修道者との話し合い・協力・協議の場を通して運営が進められていきます。そこでの協議を土台にして、県レベルのこと(例えば県連絡協議会や県大会など)や教区レベルのこと(例えば教区宣教司牧評議会の構成など)も改めて考えることにもなるでしょう。

各地区では、派遣される司祭は必ずしも共住するとは限らず、分散して住むことも考えられます。しかし、その場合でも地区全体を担当する派遣ですから、司祭も信徒も、司祭は居住する小教区だけでなく

生命の泉

昨年はどんな年だったのかの判断を何によってすればよいのだろうか。「小さな者」、「身分の低い者」であるとの自覚をもつ私たちは尖閣諸島問題や防空監視区域の設置などで嫌中、嫌韓気分が広がる中で特定秘密保護法の可決成立などに不安を覚える。正義を振りかざす武力衝突などだれも望まない▼去る3月来日したフランスの女流映画監督が、TPP問題は映画にまで及ぶことを教えてくれた。大衆受けする性と暴力を扱った映画が怒涛のように押し寄せてくれば、地味でも良質な作品は消えてしまう、と懸念を表明していた。私たちはTPPというとき自国の産業構造はどう変わるか、ということだけだと思っていただけに考えさせられるコメントだった▼自由な経済活動だけなら強い者が一人だけ勝ち残る。弱い国の文化や伝統は消滅し民族としてのアイデンティティは損なわれる。人でも持たざる者は存在する理由がない▼大震災以降、自然が猛威を振るっていて冬でも台風や竜巻・突風が起こる▼先進諸国の過剰なエネルギー消費こそ自然を破壊すると訴える島々の人々には、すぐに手を打ってもらえない▼利潤をあげることはゲーム感覚で出来るので心が痛まない。その結果にどんな影響が出るのかは他の人の仕事だ▼「富に仕え」(マタイ6・24)た結果として自分で判断できず愚かな奴隷になる。サリン事件をはじめ尼崎連続変死、青森の犬用の首輪での暴行致死など連続して起こるやりきれない事件には共通した特徴がある。主犯は逆らうことを許さない絶対的な指導者だ。配下は自分で考えても神がかりの指導者に太刀打ちできない▼昨年はいじめが多発した。目標や未来の夢を見出せない子に今何をすればよいのかわからないのは当然だ▼「貧しい人々」(ルカ6・20)とは「目を覚ましている」(マルコ13・33)人々ではないか。(守)

く地区内全小教区を等しく担当するという意識を共有し、その認識を深める必要があります。例えばまず問題になることの一つに、各小教区のミサ開始時刻が考えられます。主日の同時刻にどこでもミサがあるというわけにはいきませんから、話し合い、譲り合ってミサの時刻を調整することになります。また、主日のミサが難しければ、それに代わる前晩のミサの可能性も考えられます。どうしてもミサができない場合の礼拝集会として集会祭儀が行われるように準備（養成）しておく必要もあります。そしてまた、地区が宣教司牧の第一の現場ですから、地区内にあるカトリック関係の種々の事業所とそこで働く人々への関わりも考えていただくようにお願いしたいと思います。

地区制では、散在する小教区の統廃合を図るのではなく、反対に、信者の集まる場所へ司祭に出かけていただき、「教会の活動が目指す頂点であり、同時に教会のあらゆる力が流れ出る源泉である典礼（ミサ）」ができるだけ多くの場所で行われるようにしたいのです。主の日に、できるだけ多くの信者が秘跡という神さまからの恵みにあずかることのできる機会を増やしたいからです。現在仙台教区で働いておられる司祭方の数ならまだそれができます。そして地区内の信徒および修道者方の積極的な協力を得て、まず地区での交流・協力のありようを定着させ、この先、もしも司祭数が少なくなったとしても地区内での交わりが継続されること、さらには地区と地区との交流・協力・連携にまで広げる可能性も展望できると思っています。

終わりに、仙台教区にも海外から、特に東南アジアから来られた方々がたくさんいます。それぞれの地区にも少なからずおられるでしょう。その方々はお客さんではなく仙台教区という教会の一員です。高齢化により停滞気味となっている日本人信者の教会活動に活力を注ぎ入れ、元気づけてくれる方々でもあります。各地区ではその方々との関わりにも心を寄せてくださるようお願いいたします。

新年を迎えて

司教　平賀徹夫

昨年の「信仰年」を経て、今、新年を迎えました。信仰年の実りとして何かを感じているでしょうか。信仰年の過ごし方の一つに「なぜ信じ、誰を信じ、何を信じているのかの確認」がありましたが、これは信仰年後の暮らしの中でもずっと心に留めていたいことです。イエス様を信じて生きることが、自分だけでなく子どもたちや友人や、周囲の人たちにとっても本当によいことなのだ、という確信へと成長するならすばらしいからです。

仙台教区はこれから「地区制」という形をとります。一つ一つの小教区教会が独自にだけではなく、地区内の教会間の絆・つながりを深め、イエス様を信じて生きる・生きようとしている人同士が顔を合わせて、一緒に楽しみ・喜びを分かち合うことができたらよい。そのために、互いに都合をつけて訪問する機会を多く持つことから始めてはどうでしょう。大人だけでなく、子どもたちも連れて訪問し合い、合同の子どもの集いなどもできないでしょうか。小学生、中高生、青年たちの交流のための奮起もお願いしたいです。地区内でできたらいいですが、当然、地区に限らない企画もできたらもっといい。「元食男子」の集まりも続けられるはずです。

「心の港」（フランス語で「ポワン・クール」、英語で「ハーツ・ホーム」）という青年たちのグループがあるので簡単に紹介します。フランスで起こった運動体で、一昨年の夏、東日本大震災で苦しんでいる人たちのために何かできないだろうかと、創立者と一緒にやってきました。

祈りを大切にする共同生活を送り、子どもや若者、特に貧しく苦しんでいる人の友となるという活動をしています。現在、4人のメンバーが仙台を本拠地に、日本語を学びながら仮設住宅訪問やホームレスの人たちへの炊き出しに加わったりして、すでに沢山の友達もつくっています。昨年12月7日に大船渡教会を訪問したらそこに２人来ていて、教会の人たちとも友達になっていたので、私はある種の感動を覚えました。

今後、子どもたちや青年たちの交わりの力になってくれるのではないかと期待できそうです。

考えるべきことはたくさんあり、新たに直面する事柄も次々と起こってくることでしょう。父である神さまのお導きを信頼し、共に祈りながら、知恵を合わせて対応して進んでいきたいですし、教区の皆様からのご意見や提案、質問なども寄せていただけたらありがたいです。

それでは今年も、神さまからの豊かな恵みが皆様の上に注がれる一年でありますようにお祈りし、教区内すべての皆様に司教からの祝福をお送りいたします。

２０１４年１月１日

カトリック仙台司教区長

司教　マルチノ平賀徹夫

インターナショナルミサ

聖霊降臨祭(堅信)

降誕祭(洗礼)

司教日程

１月・２月

1・1㊌ 神の母マリア
14㊋ 司祭評議会・教区司祭団・役
17㊎ 部落差別人権委・事務局会議
19㊐ 北仙台教会
21㊋ 子どもと女性の人権擁護センター
22㊌ 全ベース会議
27㊊ 教区司祭団月例会
28㊋ あけの星会
30㊍ 学法カトリック学園理事会
2・3㊊ ＮＰＯ法人「カリタス釜石」
4㊋ 司祭評議員会・教区司祭団・役
6～15 巡礼旅行
17～21 臨時司教総会
24㊊ 県別司祭総会

2013年度教区研修会
「ミサとは？」秘跡である聖体祭儀

講演　森田　直樹神父（仙台中央地区担当）

【講演要旨】

1．はじめに―喜びに心をはずませ

初めの祈りとして聖歌「よろこびに」（典礼聖歌163）を歌いましょう。

「よろこびに　心をはずませ　神の家に行こう」子どもの頃、遠足に出かけるときのようにワクワク、ドキドキしながら、という思いで神の国に行くのです。

聖歌は、一つ一つのことばを大切に丁寧に歌いましょう。

2．ミサの意味と特性

(1) ミサとはなにか

あなたにとって「ミサ」とは何ですか？

ミサの中で行われることには、神と出会う、みことばを聞く、司祭の話を聞く、教えを深めるなどがあります。ミサの結果として、元気になる、幸せになる、心の平安を得られるなどがあるでしょう。

ミサには、完全な、意識的な、行動的な参加が必要です。祈りの雰囲気を作ること、祈ること、聖歌を歌うこと、沈黙も、意識的に、自分から行動的に参加することが大切です。

ミサは、司祭一人で行うことではありません。司祭のお祈りに耳を傾け、その意味を考えて「アーメン」と答えることも意識的、行動的な参加です。

ミサの雰囲気を作ることは、司祭一人ではなく、そこにいるみんなの務めです。

(2) 最後の晩餐の「記念」

ミサは、2千年前の最後の晩餐の記念ですが、この「記念」ということが大切です。記念とは、単に過去の出来事を思い起こすということだけでなく、偉大な救いの業を現在の恵みの働きとして現在化することです。

(3) 神との出会い

ミサにおいてわたしたちは神と出会います。キリストのことばを聴き、教えをいただきます。教えを受けるということは、それを生活に生かすということです。みことばを聞くことと、それを生きることは不可分なのです。

(4) 神と出会う場

秘跡は、神との出会いの場です。「キリストのからだ」と言って、受ける人が「アーメン」（そのとおりです）と答えてご聖体を受けます。この「アーメン」一言にそれを受ける人の心が表れます。聖体の秘跡によってわたしたちは、神と出会うのです。

(5) 食事のイメージ

ミサは、最後の晩餐から始まったので、食事のイメージがあります。コリント第1の手紙によると、当時はミサの前に食事をしていたようです。

聖体は、食事であり、交わりであり、一致であり、いけにえであり、キリストの記念と現存です。

ミサにおいて、キリストの体をいただくという食事を分かち合い、神と一致します。同じキリストの体をいただいた者として交わり、ひとつになるのです。キリストにおいて兄弟姉妹なのです。

(6) 過ぎ越しのイメージ

最後の晩餐は、「過ぎ越し祭」の食事でした。過ぎ越し祭は、エジプト脱出の記念でした。

「子羊をほふり、腰帯を占めて、杖を持ち、種無しパンと子羊の肉に苦菜をそえて急いで食べなさい」と出エジプト記に書いてあります。また、羊の血を門の鴨居と柱に塗ることによって、この家はイスラエルの民であるから、神は、災いをもたらさず、その家を「過ぎ越す」というところから「過ぎ越し祭」と言われています。

過ぎ越し祭の中には、その家の主が、パンを取って祈りをささげ、割ってみんなに配る。また、ぶどう酒を祈りをささげて飲む。エジプト脱出の話等を聞くなどのやり方が決まっています。エジプト脱出の記念は、そのことを思い起こすことで今のものになるのです。

(7) 想起による現在化（現存）

キリストの最後の晩餐を記念する、救いの出来事を記念するというのは、それが現在のものとなり、それによってキリストが現存するということです。ミサの中でそれを体験します。

聖書朗読では、朗読者をとおして神ご自身が、みことばを語られる。イエスのお話も2千年前に起こった出来事でも、今それが出現するのです。ミサで語られる神のみことばはわたしたちが耳にしたときに実現するのです。

イエスの救いの出来事すべて、2千年前にささげられた十字架のいけにえを思い起こすことで現在化するのです。

ミサも、聖霊の助けによって今のものになるのです。現存になるのです。パンとぶどう酒が、キリストの体、キリストの血になるのです。

ミサの中で「聖霊を求める祈り」が唱えられます。「聖霊によってこの供え物をとうといものにして下さい。キリストの御からだと、御血になりますように」という祈りです。もう一つは、交わりの祈り、「キリストの御からだと御血に共にあずかるわたしたちが聖霊によって一つに結ばれますように」と祈ります。

3．ミサの在り方と刷新

(1) 典礼憲章とカテキズムの考え方

典礼憲章によると、ミサは、キリスト者の生活全体の泉、わたしたちの生活に必要な力が湧き出てくる泉、わたしたちが目指す頂点であるといわれます。

わたしたちは、ミサにおいて救いの出来事を思い起こし、毎日の生活における困難、苦しみ、悲しみ、喜びをイエスを通しておささげします。カテキズムによると、ミサは父なる神への賛美と感謝であるとあります。神の愛が現れること、それを記念すること、記念の現在化、キリストの現存、神との出会い、交わりであり、そこに神の霊が働き、私たちは、そこで十字架の出来事を記念するのです。キリストの一回限りのおささげにわたしたちもあずかっていくのです。奉納は、パンとぶどう酒だけではなく、私たち自身をささげることです。そして、それが聖変化されて、聖体拝領を通してキリストの体になっていく。私たちは聖体拝領によってキリストのからだに変えられます。そう考えると、ミサというのは、すごい事なのです。喜びに心はずませていきたいと思いませんか。

(2) 自国語によるミサ典礼文

それまでラテン語であったミサの祈りは、50年前の第2バチカン公会議の後に、日本語に変わりました。典礼憲章が出され、ミサ

の内容が良くわかるように、自国語の祈り文を用いてよいことになりました。ミサの中で日本語で神のことばを聴き、日本語で応え、日本語で祈り、日本語で歌えるのです。それ故、そのことばの一つ一つを大切にしたいのです。

4．ミサの構造と奉献の意味

(1)ミサの構造―その区分と相互関係

ミサは、大きく分けると、(a)ことばの典礼、(b)感謝の典礼とに区分されますが、この二つは不可分のものです。

この研修会を引き受けるにあたって司教様に何かご要望はございませんかとお尋ねしたら、司教様は、「仙台教区内の信徒のだれもが、いつまでにミサに出ればよいのですかと言わないように教えてください」と言われました。昔は、聖変化までに出ればミサにあずかったことになり、聖体拝領が出来ると考えられていました。

しかし、「聖変化」をするには、救いの記念をしなければなりません。それは、福音朗読に表れます。第1朗読、第2朗読は、福音の内容を深めるために必要です。

ことばの典礼をよく聞くためには、その前の「回心の祈り」をもって心の準備をすることが必要です。さらに、教会に集まってきた信徒たちが心を一つにし、心をしずめ、ミサの祈りに入るために、「入祭の儀」があります。

結局、ミサは途中からでなく、早めに来て、心をしずめ、最初から参加することが必要だということになります。

(2) 奉献文の内容―その深い意味

もともと、カトリック教会の奉献文は一つだけでした。

現在は、第1奉献文（伝統的ローマ・ミサ典文）、第2(使徒伝承の奉献文)、第3(聖霊の働きに注目した奉献文)、第4（東方教会の典礼にならった奉献文）の4つがあります。

第3奉献文を読んでみましょう。

「まことに聖なる父よ、造られたものはすべて、あなたをほめたたえています」、私たちもその一員として神様をたたえます。「聖霊の力強い働きにより、すべてにいのちを与え、とうといものにし、絶えず人びとをあなたの民としてお集めになるからです」、この民として集められたものがエクレジア（教会）です。「あなたにささげるこの供えものを、聖霊によってとうといものにしてください」、これがエピクレーシス(聖霊の働き)です。「パンを取り、あなたに感謝をささげて祝福し」、このように神に向かって祝福することは、神に賛美をささげることを意味します。

「主の死を思い、復活をたたえよう」、出来事を思い起こし、それによって、それが今のものとなります。「受難・復活・昇天を記念し」、これは救いをもたらすものです。

「いのちに満ちたこのとういけにえを感謝してささげます」、イエスの一回限りのいけにえに合わせてわたしたちの小さなささげものを受け入れてくださるのです。

「聖霊に満たされて、キリストのうちにあって一つのからだ、一つの心となりますように」、これはエピクレーシスの二つ目の祈り「交わり」です。「わたしたちがあなたにささげられた永遠の供えもの」となりますように、「すべての聖人とともに神の国を継げ」ますように、「このいけにえが、全世界の平和と救いのためになりますように」、人を赦し、愛していくものに変えられ、世界中から憎しみが消えていきますようにと祈ります。「あなたがここにお集めになったこの家族の願いを聞き入れてください」、いろんな心配ごと、困難なこと、それらすべてを持って行ってミサにささげるのです。「あなたの子がどこにいても、すべてあなたのもとに呼び寄せてください」…。「アーメン」、これは、これまでの奉献全体をまとめて、そうなりますようにと祈る重要な「アーメン」です。

こうした祈りや朗読は、意味を考えながら、心をこめてゆっくりと唱え、朗読し、聖歌は、テンポを守りことばを大事にして歌いましょう。(花巻教会での講演・菅野耕毅氏のまとめを参考に編集)

＝ロゴス公開講座＝

「ロゴス（みことば）を歩む」

―霊の火と共に―

講師 宮本 久雄師

（ドミニコ会地区長、上智大学教授）

11月17日（日）北仙台教会

イエスの教えをどのように理解し現代の問題に対処していくか、たとえ話を例にとり説明された。

(1)良きサマリア人(ルカ10章25-37)

ユダヤ人はユダヤ社会以外の人と交わることはなく、まして援助をうけることはあり得ない。追いはぎに襲われたユダヤ人は、祭司とレビ人に見捨てられ、ユダヤ社会から排斥されたと感じたので、はじめてサマリア人の助けを受け入れた。一方のサマリア人も、自分の属する社会の人以外、特にユダヤ人とは接触しない習慣であったが、傷ついたユダヤ人を見て心からの同情を感じて援助をした。両者共に各々が属する社会の枠を出たことで、「助ける」、「助けを受け入れる」、という人間的な関係が可能になったことを強調された。

(2) 放蕩息子(ルカ15章1-32)

ユダヤ社会を離れ奴隷の身分になった「けがれた」息子を、父親はすぐに抱きしめたが、これは律法に違反する行為である。父親はユダヤ社会から追放されることをも覚悟して息子を抱きしめた。ユダヤ社会から排斥された徴税人や病人と食事をするイエスと重なる行為である。

現代社会の種々の問題に向き合うには、これら聖書のたとえが示すように、各自の生活や社会の既存の枠からはみ出すことを恐れずに一歩踏み出すことで、新たな出会いが可能になるであろうと指摘された。このような講師の勧めを実行することは決して容易ではないが、教皇フランシスの「貧しい人たちの教会」を目指すための重要なステップと感じた。

なおこのロゴス公開講演会は、ロゴス研究所の再開10周年を記念する行事でもあった。

縄文の心

日本人の直接の先祖である縄文時代の人々は、一万年もの長期間にわたり、山や海など自然の恵みのみで生きていた。その頃は活発な火山活動による噴火や、多くの地震、津波などにより、自然の災害にも悩まされていたようだ。そのような中で、自然に対する感謝や畏敬と共に災害を受け入れる態度も身に付けてきたのではなかろうか。

都会という人工的な環境の中で生活していると、自然を身近に感じる機会が少なくなった。皮肉なことに、災害の時にのみ自然の力を感じる。自然の恵みと災害の両方を受け入れた「縄文の心」を持つことで、自然のすべてを受け入れ、私たちの身体を気づかうのと同じように、地球環境にも心を留めたい。

地球を大事にする会　猪岡　光

仙台教区「新しい創造」…第３期の取り組み

三位一体修道院 福島県原町で活動

２０１３年９月８日　聖母マリアの誕生日の祝日に「三位一体修道院」が誕生いたしました。聖霊会のシスター（久松カズヱ、早川節子）、そして、聖心会の畠中千秋の３人で共同生活が始まりました。「聖霊会(聖霊)と聖心会(イエス)の共同体に御父が共におられるので『三位一体修道院』と命名されたのは、聖霊会日本管区長、シスター村上多美代です。

私達の一日の生活をお伝えします。毎朝、御父と御子と聖霊を礼拝・讃美することから始まります。一日の祈りと働き・人々との交わりに主イエス・キリストが共にいて歩んでくださることを願いつつ、すべてをお委ねできるこのひと時が、私達三人は主にあって一つに結ばれているといった思いへと導かれています。

そのあと原町ベースへの早朝の出勤が開始。近くの公園で行われるＮＨＫのラジオ体操にボランティアさん達と参加します。そこには周辺の仮設住宅に住む方々が30人程集っています。仮設住宅に閉じこもりがちにならないようにとお医者さん達が始められました。

その後、原町教会の７時のミサに参加。狩浦正義神父様の司式のもと、マリアの宣教者フランシスコ会のシスター（小沢、佐々木、重藤）、ボランティアの方々、私たち３人です。毎日のミサがいつも世界中の人々とつながる「特別のミサ」として感じられます。

ボランティア活動に出発される皆さんを送り出し、私たちもそれぞれの仕事に移ります。被災地視察案内、仮設訪問、やさい配りなど、日々のニーズに応えて一日を送っています。一日の活動を終えてベースに戻った皆さんと共に夕食をいただきます。一日の体験、出来事、感じたことの分かち合いを通して、私たちも一人一人の中で働かれた主の御業にふれ、感動し、喜び、新鮮な思いに生かされています。この時間の一つ一つが宝物です。

カンボジア・ステンミエンチャイ地区での活動報告①

元寺小路教会小野　武

２０１１年７月６日から、２０１３年７月５日までの２年間、カンボジアのプノンペン郊外にあるステンミエンチャイ地区のゴミ山でアルミ缶やペットボトル等の有価物を拾って生活している人々の子どもたちへの教育支援活動を実施して来ました。その活動を振りかえりながらシリーズで報告させていただきます。

今回は、カンボジアへ派遣された経緯について触れることとします。

―応募動機―

思い起こせばＪＬＭＭ（日本カトリック信徒宣教者会）の門をたたいたのは、サラリーマンを定年退職した年（65才）でした。47年間勤務し、少し時計の無いところでノンビリしたい気持ちもありました。一方、社会で何か私にできることはないかと思い巡らしてもいました。そんな時、いつも流し読みしているカトリック新聞に小さなＪＬＭＭの海外派遣研修生募集「貧しい人々と共に生きる」に目がとまり、カンボジアへの派遣につながる道が開けたのです。（ＪＬＭＭの活動地は主に東南アジアで、派遣地はＪＬＭＭで決定）

なぜ海外を志向したのかには二つの理由があります。一つは、イスラエル巡礼の旅で荒野で貧しく暮らす遊牧民（ベドウィン）が枯れ草しかないと思われている中で逞しく生活している姿を見て感動しました。二つ目は、中学校での英語教師との出会いです。中学に入る前に英語に興味があり、発音など事前に勉強して授業に臨みました。先生が問題を出した時、いち早く手を挙げましたが、一回も答えさせてくれませんでした。段々英語が嫌いになり唯一の赤点科目になってしまいました。そのため、いくたびかの進路選択で挫折を味わうこととなりました。大学を出ても英会話が出来ないで人生を終わりたくないとの思いが込み上げ、60歳で英会話を習い始めました。

孫が生まれるたびに、孫が日本語を覚えるのと私が英会話を覚えるのとどちらが速いか競いましたが、連敗でした。中学時代の英語の先生が大嫌いでしたが、今はカンボジアでの貴重な体験をさせてくれた恩人と感謝することが出来るようになりました。

（応募資格は基礎的な英会話が条件でした）

―派遣―

そして国内での約７カ月の研修を経て、カンボジアに派遣が決まった時は、周囲の人は地雷がいたるところにある危険な国に派遣されると思い「気を付けて、危ないところに近寄らないで」と心配してくれました。しかし、私は、少し大げさだけど「友のために自分の命をすてること、これ以上に大きな愛はない」（ヨハネ15章）と気持ちが高ぶっていたのが思い出されます。

２０１１年１月５日成田からベトナム経由でカンボジア　プノンペンに到着しました。現地で６カ月のクメール語の研修を終えて、いよいよ２０１１年７月６日にステンミエンチャイ地区の子どもたちがいるプテア・コマ（子どもの家）での初仕事が始まりました。そして寝泊まりしている事務所から４．２km を自転車で通うことになりました。

（つづく）

喜多方教会設立50周年を祝う

11月2日(土)、カトリック喜多方教会は創立50周年の記念式典を挙行した。平賀徹夫司教様の司式による記念ミサ=写真=は、80数名の参列者で聖堂は満杯になった。奉納の歌はカトリック聖歌集『あめのささき』が日本語と英語で1番2番と交互に歌われ、フィリピン人とのコラボとなった。閉祭の歌は昔懐かし『テデウム』で締めくくられた。

祝賀会は、教会と棟続きの喜多方カトリック千草幼稚園ホールにおいて行われ、平賀司教様、グアダルペ宣教会管区長ダビデ神父様のご挨拶をいただいた後、この春まで会津地区担当司祭で、今は郡山教会の板垣神父様の乾杯で祝宴となった。千草幼稚園児の合唱が披露されると、感動の天使の歌声に盛大な拍手が送られた。祝宴の中では、当教会とゆかりの深い神父様やシスター方から、たくさんのお祝いのお言葉をいただき、またプレゼンテーションとして、当日配られた記念誌の各ページを、簡単なコメントを入れながら約10分間にわたりプロジェクターで上映。ご挨拶文や寄稿文は24稿、教会の歴史は豊富な写真と共に28頁に紹介され、改めて先人たちの偉業を称えることができた。

喜多方教会は、グアダルペ宣教会が会津若松教会で初の日本宣教を始めた1958(昭和33)年から5年後の、1963(昭和38)年に設立された。その計画は、初期の宣教師たちによる会津喜多方地区に脈々と伝わる信仰の遺産への深い認識と、将来への展望から生まれたものと思われる。

信徒にとってこのたびの50周年記念式典は、時と共に忘れ去られようとしていた大切なものを改めて見つめ直し、私達の今がいかに恵まれているかを思い起こす貴重な機会となった。

盛岡でセルフ・エンカウンター

第12回盛岡セルフ・エンカウンターがシャルトル聖パウロ修道女会第2修道院（黙想の家）で11月1日（金）19時～3日（日）18時の日程で開催され、静岡、神奈川、埼玉、宮城、秋田、青森、岩手から23名が集った。指導司祭は今年82歳になられたフランシスコ会のマリー・ダナン神父。毎年、六本木のフランシスカン・チャペルセンターから重い荷物を持って盛岡に来てくださる。

セルフ・エンカウンター（SE）は1976年にスペインのカルボ神父により創設されたFIRESの中の個人のためのプログラムです。

FIRESとはFamily（家族）Inter-Communication（通じ合い）Relationships（関係）Experience（体験）Service（奉仕）の頭文字を取ったもので次のことを意味している。「家族は深く通じ合い、ふさわしく関係を生かすならば、すばらし体験が得られ、その時こそ奉仕するようになる」FIRESにより個人、夫婦、家族のだれでも「愛と一致」のうちに成長する機会が提供されるようになった。

ダナン神父は「体験に無駄は無い、どんな体験も出会いがあれば必ず宝に変えられる」と言う。私はFIRESに関わって、私の中に現存するキリストと出会えた。こんな体験がなければもっといい人生が歩めたのに、という思いから解放された。そして私はこの体験を通してキリストに呼ばれたんだ、と思えるようになった。

来年は「ご聖体のエンカウンター」を11月に開催する予定。神や自分にもっと深く出会いたいと思っておられる方にお勧めしたい。

《問い合わせ先》
〒020-0107 盛岡市松園1-28-15
湯口由紀子（盛岡四ツ家教会所属）
電話&FAX：019-661-8996

カテドラルにパイプオルガン設置

典礼憲章に「パイプオルガンは、その音色が、教会の祭式にすばらしい輝きを添え、心を神と天上のものへ高く揚げる伝統的楽器として、ラテン教会において大いに尊重されなければならない」と記されていることからも、パイプオルガンがカトリック教会のミサ典礼にふさわしい楽器であることがわかる。

元寺小路教会では、1993年教区センター完成時に、ハモンド社の電子オルガンを導入。しかし、2006年頃から、オルガンに不具合が生じるようになり、専門家に点検してもらったところ、修理しながら使用したとしても電子オルガンの寿命は約20年といわれた。それを踏まえ2008年に「元寺小路教会大聖堂オルガン購入検討委員会」を設置し、当教会にどのようなオルガンがふさわしいか、典礼、音響、維持管理、経費など様々な観点から総合的に検討を重ねた。その間、仙台市や県外のパイプオルガンが設置されている教会を見学したり、パイプオルガンに造詣の深い方をお招きして勉強会を開催して、最終的に総合的な観点からパイプオルガンが望ましいという結論に達した。

2009年11月の臨時総会に「パイプオルガンに関する基本計画」を提案し承認を得て、購入の手続きに入った。2010年1月、契約関係業務仲介者に株式会社望月オルガンを選定し、数社に見積もりを依頼、そのうちからドイツのイェーガー&ブロンマー社に絞り、同年5月の教会総会にビルダー（製作者）と事業費などについて提案し、承認を得た。その後、ドイツのイェーガー&ブロンマー社に製作の発注を依頼、最終的にストップ数は19に決定した。

同年募金委員会を設立し、翌年の2011年1月から募金活動を開始。募金活動は2013年12月までの3年間。総事業費は3，400万円、このうち教会会計から半額の1，700万円、残り1，700万円を募金で。この金額は当教会の信徒の教会維持費の1年分とほぼ同額となる。募金は他教会所属の方からも寄せられた。募金をお寄せいただいた方に、この紙面を通して心から感謝申し上げたい。

パイプオルガンが主のみことばを伝える楽器として、また、共同体の信仰を深め、宣教活動にも貢献できることを心から願っている。

元寺小路教会委員長　中村信忠

苦しむ人の中にキリストはいる
カトリック看護協会全国大会 in 仙台

日本カトリック看護協会（城麗子会長／以下ＪＣＮＡ）の「第55回全国大会」が10月25日～26日、仙台市内のホテルと元寺小路教会で行われた。全国からカトリック看護師ら165人が参加した。「大震災を乗り越え復興に向かって―生かされているいのちの分かち合い」をテーマに、二つの講演と被災者によるシンポジウムが行われ、被災者に寄り添って困難を乗り越えていく決意を新たにした。

初日、「キリストの輝き～マザー・テレサに学ぶ奉仕の心」と題して、片柳弘史神父（イエズス会）が講演を行った＝写真＝。冒頭、福島の現状に触れ、苦しんでいる人の現実を知ることの大切さを、イエスのように出かけて行って、寄り添い、食事をし、触れ合うことの大切さ強調した。

マザー・テレサとの出会いでは、彼女に会った人は皆、「自分が一番マザーに愛されている」という。私もそう思った。彼女は、それほど出会う人に希望や生きる力を与えてくれる。私がまだ洗礼を受ける前に、マザーのところでボランティアをしていた時、ある日、「あなたは何をぼやぼやしているの、早く神父になりなさい」といわれたエピソードを紹介した。

マザー・テレサの母は、「一番大切なことは、神さまを悲しませないことだ」と、常に子どもたちに教えていた。マザー・テレサは、いつも「痛みを感じるほどに愛しなさい」、「貧しい人の中にキリストを見つけること」を姉妹たちに話していました。「自分を愛するように隣人を愛しなさい」ということを実行するには、まず、自分を好きにならなければならない。ありのままの自分を受け入れるところから、始めなければならない。

続くシンポジウム＝写真下＝では、光ヶ丘スペルマン病院の看護師長、佐藤真樹子さんを座長に、3人のパネリストが被災体験を話した。岩手県在住の看護師、鈴木栄子さんは、岩手県立大槌病院に勤務中に被災、津波が病院の3階まで押し寄せた。入院患者53名の命を守ることを最優先し、不眠不休で患者の世話にあたった。一人の死者も出さず、5日目に自宅に戻ったが、そこで母親の遺体と対面した苦悩を話した。

また、日本人と結婚して50年になるフィリピン人の庄司マリーンさん（元寺小路教会）は、津波で自宅が流されたこと、生きがいを亡くした夫のこと、近所の友達が亡くなったことなど涙を流しながら語った。それでも、被災したフィリピン人同士の助け合い活動をはじめ、避難所で外国人被災者の安否確認、フィリピン人被災者をオタワ愛徳修道会につなげるなどの活動を紹介した。

さらに、福島県在住の看護師、東谷光子さんは、福島県の放射能被害について、家も壊れていない、街並みも変わっていないのに避難しなければならない住民の感情や、放射能が人びとの心をむしばんでいった現状を話した。

2日目は、日本カトリック医師会仙台支部の山浦玄嗣さん（大船渡教会）が、「大津波を乗り越えて」と題して講演し、震災から「負けてたまっか」と力強く立ち上がろうとした地元の人々の様子や、自らが「ケセン語訳新約聖書」を出版した経験について話し、病者に対するイエスの姿を説明した。

閉会式では、ＪＣＮＡの旗とロザリオが、次回開催地の東京の代表者に手渡された。

午後からは、東松島市の被災地を訪問するオプショナルツアーが行われ、現地の被災者から当時の話を聞き、多くの方が亡くなった現地で祈りをささげた。

カトリック仙台教区病者障がい者団体連合会
「主イエス・キリストと共にいきる」
講師　英（はなふさ）隆一朗神父

11月10日（日）元寺小路教会で、研修会と分かち合いが行われた。

講師の英 隆一朗神父＝写真＝は、鎌倉黙想の家に居住し、黙想の指導、講演や講座に日々活躍されている。

震災の際、縁あって釜石教会に駆けつけていただき、震災の死者の救霊や被災者の復興、ボランティアのための祈りを作るなど、救援に力を発揮していただいた。また、カトリック日本病障連の担当司祭をされていることもあり、今回の講演を快く引き受けてくださった。

英神父は、マタイ11章、18章を中心に、「心を入れかえて幼子の様にならなければ天国に入ることができない。この幼子のように自分を低くするものが天国で一番偉いのである。」（マタイ18・3－4参照）マリア様もルルドで幼いベルナデッタに、また、ファチマでは、3人の子どもに現れた。私たち大人は、立派な人間になろう、偉い人に、だれからも尊敬される、そんなスーパーマンのような人になろうとする。しかし天国では、一番偉い人にはなれないのです。

「全て重荷を負う者は、私のもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」（マタイ11・28）

神は、私たちと共におられ、わたしたちが困難な時に支え励ましてくださる。二つのくびきがあり、ひとつは私が負うが、他の一つは、キリストが負ってくださっている。

「小さな者のひとりを軽んじないように、気をつけなさい。…百匹の羊のうち一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残して迷い出た羊を探しに出かけないであろうか…そのように、これら小さい者のひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみ心ではない」（マタイ18・10－14）

迷った一匹の羊が回心するためには、九十九匹の回心が必要である。

震災後、私が訪れた釜石には、神の国があった。

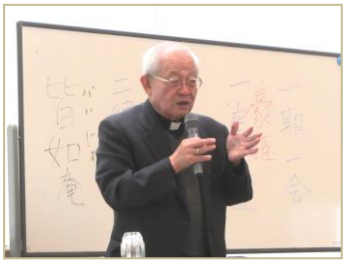
弱い立場の人、困難に苦しむ人、悲しみに打ちひしがれている人、そうした人々に心を寄せる。つまり一匹を大切にするところに神の国がある、と話した。

カトリック仙台病者障がい者団体連合会（カソック＝祈りや病人への奉仕の会、アンジェラス＝盲人の会。福島グロリア＝病者、障碍者と歩む会）は、宮城、福島、岩手の3県からなる団体で構成されている。

「信仰年にあたり高山右近の霊性に学ぶ」
～現代教会にどのように活かされるか～
あけの星会講演会　講師　溝部 脩 司教

11月5日(火)、暖かい秋の日に、日本カトリック女性団体連合会とあけの星会共催による講演会が元寺小路教会で開催され、青森、岩手、宮城、福島の各県と東京から約200名が参加した。

溝部脩司教(高松教区名誉司教)は、高山右近の茶人としての姿から話し始めた。右近の茶は、風流がなく「清すぎる」と言われていた。これは、右近の清潔な、潔癖な、筋を通していく性格を表していたと思う。



高山右近は、茶人千利休の7人の高弟のひとりであった。利休と右近は、その性格やものの考え方が良く似ていたと思う。

豊臣秀吉からキリスト教を捨てるよう強要され、「それは、できません」ときっぱりと断った。秀吉に対して「ノー」を突きつけたのは右近だけだった。

利休も右近に対して、棄教を促したが、主君の命令に背いても志を変えないのが真の武士であると答え、利休に説得を諦めさせた。

一方、利休が求めた「わび」、「さび」の茶道に対して秀吉が黄金の茶室を造り、豪華さや派手さを求めた。利休は秀吉のやり方に対して、決して迎合せず、秀吉の逆鱗に触れ、切腹を命じられた。

日本のお茶は、騒然とした市中に、庵を設け、その中で静かにお茶をたてながら、自分と向き合っていく、自分というものを見つめ直す場でもあった。

お茶は、単なる遊びごとではない。おけいこ事でもない、自分と対峙する神聖で、真剣勝負の場である、何よりも和を求める、「調和」、「バランス」を大切にすると右近は考えていた。

茶道でよく言われる「一期一会」は、今の出会い、このひととき、この空間を大切にするということです。さらに、茶室に入ったら、身分も社会的な立場も全部脱ぎ捨てて一人の人間としてその場に共にいる人たちと分かち合う、という精神です。そこには、敵も味方もない。

右近の茶室は祈りの場であり、瞑想の場、黙想の場であった。右近の茶室によく出入りしていた若い武士たちが、大勢キリスト教の洗礼を受けている。それは、右近に説得されたからではなく、時代の流れを吸い取って、何か新しい生き方を求めていたからだと思われる。

現代の若者にも新しい魅力があるキリスト教の宣教が出来ないものかと思います。

高山右近は、日本人としてキリスト教をどっしりととらえ自分のものとして、伝えていった人だと思っています。そういう意味で高山右近の列福を推進していきたいと思います。

講演を聞いた、郡山教会の佐藤薫さんは、「一期一会」の茶席においては亭主は客に対してあらゆる心を配り、おもてなしをするように、わたしたちも神様に対してそのようにしなければならないのでしょう。隣人に対して愛を持って奉仕していく心が絶えず求められていると思います。

右近の信念を貫く生き方を見習い、今を生きる私たちも、他者に対する生き方を顧みなければならないと感じました。と、感想を寄せてくださいました。

講演後、昼食を取りながら、久しぶりにお会いした溝部司教を囲んで歓談し、溝部司教式のミサにあずかり、感謝のうちに散会した。

「信じるものは、なんと幸い」
第36回「聖霊による刷新東北大会」

10月25日～27日、仙台市太白区にある茂庭荘において開催し、東北はもとより、関西、関東の方々も含め、約50名が参加した。

「信じるものは、なんと幸い」を

の言葉は、大会のテーマにもなりますね。私たちが信仰の旅をする中で、マリア様の出来事は本当に中心的なことです。信仰の模範をいただいて私たちも、この豊かな恵みを生きることができるよう、お願いいたしましょう。マリア様が幼な子のような者として、最初にお告げの通り体験された聖霊体験を通して、みことばが人となられた受肉の神秘を教会は、聖霊降臨の恵みによって受け継いでいます。またキリストを通して全ての人々が、あらゆる霊的な祝福をもって祝福されているのです。」と熱く話された。

私たちも「ハイ」と答えることができます様に、聖霊の助けを願いながら、信仰の道を歩んでいきたいと思います。

（一本杉教会　大友愛子）

聖ウルスラ修道会本部修道院・一本杉教会落成感謝ミサと祝賀会

若林区一本杉にある聖ウルスラ修道院の建て替えに伴い隣接の一本杉教会も含めた新築工事は、2011年10月9日に、旧聖堂の最終ミサから、約2年余りをかけての工事が終了し12月9日(月)無原罪の聖マリアの祭日に落成感謝ミサと祝賀会が行われた。

感謝ミサは、平賀徹夫司教の主司式でおこなわれ、工事関係者、町内会、仙台中央地区教会の信者らを含めて約200名が参加した。

平賀司教は、「この修道院と教会は、地域の人々の祈りの場です。地域に開かれたものとして地のテーマに、講師の畠 基幸神父(御受難修道会)は、「信仰の出発点は、主の呼びかけに応えることであり、アブラハムは、主の呼びかけに応えて、主の言葉に従い旅立ちました。アブラハムの信仰の旅は、私たちの生涯の旅でもあります。」さらに、ルカ福音書からマリアのエリザベト訪問の場面を読まれ「エリザベトの『主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸い』の挨拶の言葉は、大会のテーマにもなりますね。私たちが信仰の旅をする中で、マリア様の出来事は本当に中心的なことです。信仰の模範をいただいて私たちも、この豊かな恵みを生きることができるよう、お願いいたしましょう。マリア様が幼な子のような者として、最初にお告げの通り体験された聖霊体験を通して、みことばが人となられた受肉の神秘を教会は、聖霊降臨の恵みによって受け継いでいます。またキリストを通して全ての人々が、あらゆる霊的な祝福をもって祝福されているのです。」と熱く話された。

私たちも「ハイ」と答えることができます様に、聖霊の助けを願いながら、信仰の道を歩んでいきたいと思います。

塩、世の光となってください」と祝辞を述べた。

建築にあたった清水建設は「100年建築」をテーマに、地域の景観をより一層引き立てるものとして設計したとのこと。

ミサ後、聖ウルスラ修道会管区長から、設計・施工に従事した方々に感謝状が授与され、祝賀会が行われた。

（一本杉教会　大友愛子）